

【論文】

内的関係説の形而上学的含意

齋藤 暢人

0. はじめに

本稿は、英国観念論の代表的哲学者であるブラッドリーの内的関係説の哲学的意義について考察する。とくに、そこから導かれる無限後退のパラドックスの帰趨を再検討することにより、この議論が広く応用可能であること、それゆえ、ブラッドリーの提示した論証が絶対的観念論という彼の形而上学的立場とは独立したものであることを示す。この結果は、思弁的形而上学の欠陥は、その概念装置それ自体の不適切さにあると信じる者の眼には意外に映るかもしれないが、本当のところこの信念には根拠がない。議論のテクニックが形而上学的主張から切り離されることにより、理性の正しい使用方法が存在する可能性がかえって示されるはずである。

議論は以下のように進む。はじめに、ブラッドリーの無限後退を紹介し、内容を整理する (1、2)。続いてその形而上学的含意について考察し (3)、そうした思弁的形而上学に対して向けられた批判について概観する (4)。しかし、さらに重要なもうひとつの批判的文脈があって、ここでみられるブラッドリーの観念論への批判が重要な哲学的意義をもつことを指摘し (5)、さらにこの意義を明確にするために無限後退の変種を構成することを試みる (6)。かくして構成されたもう一つの別種のパラドックスの射程について考察し、結論を導く (7、8)。

なお、本稿ではいくつかの図表を用いるが、それらはすべて筆者によって作成されたものである。

1. ブラッドリーの無限後退

英国の思想風土において支配的なのが経験論的思潮であることは言うまでもない。しかしその中であって、フランシス・ハーバート・ブラッドリーは、絶対的観念論を唱えて形而上学的思弁への傾向を鮮明にした特異な哲学者として知られている。わけても悪名高いのは、その関係の存在をめぐる主張であろう。彼によれば、関係概念は矛盾を内包しており、したがって関係の存在は否定されるべきである。この高純度の思弁の帰結は重要である。彼はこれを根拠に、存在するのは唯一の絶対者であるという一元論に突き進む。形而上学者の面目躍如というところである。

このような絶対的観念論の試みは、人間知性が自らの限界に迫る努力の一事例として十分に印象的なものであるが、それを構築するための形而上学的推論の細部も非常に興味深い。ブラッドリーが関係概念を否定する理由、すなわちその矛盾とは、それが無限後退をひきおこすから、というものである。そして、この無限後退それ自体は、彼の独自の関係観である内的関係説から導き出されるのである。この関係概念の分析から無限後退を導く一連の議論はいわゆるひとつのパラドックスであり、今日彼の名を冠して「ブラッドリーの無限後退 Bradley's Regress」と呼ばれる。

ブラッドリーはこの無限後退をさまざまな機会に提示しており、そのたびごとに細かな相違がみられたり、あるいは主張に揺らぎがあったりする。だが、ここではそのもっともよく知られている姿を紹介し、以下それについて考察することとしよう。彼は、主著『現象と実在』において、以下のように論じている。

砂糖は、白くて、硬くて、甘い。では、これらの性質はこのひとつの物質にいかにして結びつきうるのか。それらの性質は相互に異なっていて、それぞれについて述定できたりはしない。ある性質 A はある性質 B との関係においてあるのだろうか。しかし、A は「B との関係において」ではない。では、A と B を結びつける関係 C があればよいのだろうか。しかしそうだと

すると、一方で新しい関係Cと、他方でこれまでのA、Bとを結びつける新しい関係Dも必要となる。しかしこの手続きは繰り返され、際限なく続く。新しい関係Eが、DとA、B、Cを結びつける、というように。かくして関係概念は無限後退をもたらすⁱ。

また、次のようにも述べている。すなわち、性質が関係を必要としないなら、関係は存在しないが、性質が関係を必要とするならば、関係が存在することになる。さらに、そのような関係は、それが結びつけようとする諸項と結びつくために新しい関係を必要とする。この手続きは明らかにいくらかでも繰り返されうるものであり、次々と新しい関係が要請され、生成されるⁱⁱ。

ここから直ちに察せられるように、ブラッドリーの無限後退とはいかなるものかを感覚的に理解するのは、むしろ易しい。その正体がヘーゲルの弁証法を想起させる思弁的トリックであることは容易に見破ることができよう。だが、ブラッドリーの議論がいかなる意義をもつのかをより正確に把握するためには、そうした皮相な理解を超えて、それを根柢から支える理論的根柢とはなにかを十分に吟味しなければならない。

2. 分析

ブラッドリーの無限後退は形而上学的議論ではあるが、その内容は一見したところ以上に論理に深くかかわっており、その内容を形式化して整理することにはいくらかの価値がある。ブラッドリー自身の述べ方は、今日の論理学者の目から見ればやや古典的に過ぎるようにみえるが、これに現代論理から借用した記号法による衣装を被せ、その形式的な構造がくっきりと浮かび上がるようにしてやると、パラドックスを導出する論理の運びを以下のように明快に述べなおすことができるⁱⁱⁱ。

一般に、ある n 項関係 R が与えられたとき、 R の関係項と R 自身を包括する新しい関係 S が要請されるとすれば、新しい関係が無限に生成される。一般的には次のようになる。

$$S^{k+n}_k \cdots S^{n+1}_1 R^n a^1 \cdots a^n \quad (k \geq 2)$$

特殊な場合によって例示しておく、二項関係 $R^2 a^1 a^2$ があつたとき、この関係を構成する項に関する新しい三項関係 S^3_1 が $S^3_1 R^2 a^1 a^2$ として要請されるが、さらに S^3_1 を含むようにこの要請が繰り返され、

$$S^{k+2}_k \cdots S^3_1 R^2 a^1 a^2 \quad (k \geq 2)$$

となる。

このパラドックスは一形而上学者の気紛れの所産にみえるかもしれないが、これと類似したものがマイノンクによって提案されており、少なくとも形而上学者の興味を引き付ける力はある。研究者による解説をもとにその内容を見ておくと、それは次のようなものである^{iv}。

まず、 Rab は事態 C をなす、とする。また、このとき、 a と b は C の構成要素で、 R はそうではない、とする。すると、まず以下のことが言える。

a と b を構成要素とする事態 C がある。

a と b を C に結びつける関係 R がある。

そのうえで、各要素は事態を（自動的に）構成し、したがってまた、それらを結合する関係がある、ということを読めると、以下のような一連の事態が出来る。

a と b と R を構成要素とする事態 C' がある。

a と b と R を C' に結びつける関係 R' がある。

a と b と R と R' を構成要素とする事態 C'' がある。

a と b と R と R' を C'' に結びつける関係 R'' がある。

(以下同様)

かくして、無限後退が生じる。

マイノックによれば、この無限後退は必要な関係を要請しているにすぎず、悪性の無限後退ではない。彼は、線分がより小なる線分に無限に分割されるようなものである、という。この比喩は示唆的であるが、その理由はのちに明らかとなろう。

ブラッドリーの無限後退の特色として、次のことを確認しておこう。ブラッドリーが結合、結びつけるなどの語を用いて説明していることから明らかかなように、これは、相互に切り離されている項を総合しようとして生じるパラドックスであり、いわば「総合のパラドックス」である。

3. 形而上学的含意

続いて検討したいのは、この無限後退のパラドックスを提示することでブラッドリーが何をしようとしていたのか、である。この議論の目的は何だったのか。しかしながら、これに関しては、解釈上の細かな相違はあるものの、大筋において疑問の余地はないものと思われる。本稿冒頭でも述べたように、ブラッドリーがこの議論を提示した目的は、次のような一連の論証として理解できよう。すなわち、次のような論証である。

- ① 関係があり、実在は多を含む
- ② 無限後退（内的関係説より）
- ③ 矛盾
- ④ 関係項の否定
- ⑤ 一元論、絶対者の措定（絶対的観念論）

もっとも、このような要約は、ブラッドリーの議論は全くの思弁的遊戯に過ぎないのではないか、という印象を与える恐れがある。さまざまな事情を斟酌すると、その正当な評価というものは案外難しいようである。

十九世紀の英米哲学にはドイツ哲学の強い影響がみられ、観念論哲学が盛

行した。英国においては、トマス・ヒル・グリーンが観念論を展開し、ブラッドリーはその思潮を引き継いでいる^v。このような時代にあって、ヘーゲル論理学の研究は、当時の新しい論理思想の真剣な研究であった。したがって、ブラッドリーの内的関係説も、単なる観念の遊戯などではなく、その背景には豊かな論理思想研究の文脈が控えている可能性がある。一部研究者の間では、次のように考えられている。

ブラッドリーは、判断が統一的でなければならないとし、そこから、判断を構成する項が相互に結びついているという内的関係説を導いた。判断の統一性の要請は、判断には一つの観念しか対応しないという要請へと強められ、ここから、判断に対応する実在が分節を欠いている、とされる。かくして一元論が帰結するのである^{vi}。

このように、たしかにブラッドリーの思想はひとつの形而上学的体系ではあるが、しかし、その背景には論理への合理的な関心がある。それゆえ、ブラッドリーの提示したパラドックスは、言語哲学の問題としてもとらえることができる。それは、今日の発展した論理を知るわれわれの目には素朴に映る面をもつが、一層研究され、磨かれるべき哲学的アイディアの原石である可能性を否定することはできない。

4. 批判

そうしたことを念頭に置いたうえで、ブラッドリーの内的関係説はいかなる哲学的含意をもつのかを考えてみよう。先に述べたように、内的関係説は、判断の統一性という要請からの帰結であって、いわばその必要条件であり、したがって言語哲学の問題でもある。では、具体的にはどのような問題なのであろうか。

それは、なぜ文は単なる語の集まりではないのか、という問題であろう^{vii}。この問いを真摯に受け止めるならば、無限後退はわれわれの言語理解に対する深刻な打撃となる。語の意味は文において問われるべきである（フレーゲ）。だが、文とは何か。文の統一性を担保するものが存在しないとすれば、この

問いに答えるのは不可能になるのではないか。さらに言えば、意味というものがそもそもあるということすら、自明なことではなくなるのではないか。この無限後退は、深刻な意味の懐疑論を招来しかねない危機なのである。

もちろん、この問題の解決策はこれまでいくつか提示されている。ただし、いずれの選択肢も決め手を欠くので、いくつかの可能な候補が示されるにとどまる。ひとつには、無限後退を否定する、というものがあり、もうひとつには、この無限後退を受け容れたうえで、その解決を図る、というものがある。

前者の方針を採るのはフレーゲなどである。フレーゲは、項のあいだに飽和／不飽和の区別を導入する。この区別により、結合するためのものが必要となる事態を回避しようとするのである。ウイトゲンシュタインが『論理哲学論考』において、事態を構成する項は相互に直接に結合する、としたのも、基本的には同類であると考えられる。

後者の方針のなかには、提示された解決策の種類に応じて多くの下位分類が可能であるが、一例を挙げれば、ストローソン、ベルクマンなどの方針がある。それは、無限後退を認めるが、それが有害であることを否定するものである。有害でない理由は、関係項を結びつける「関係」は、もはや関係ではない紐帯 tie だから、である。無限後退は生じるが、それは関係の無限後退ではなく、紐帯の無限後退であり、したがって関係の理解にとって障害にはならない、とするのである。

このように議論の構図をほんの一瞥しただけでも、解決策の候補はいくつも浮上ってきて、この問題が意外に手ごわいものであることは明らかであろう。ここでは、複雑に分岐するさまざまな可能性をしらみつぶしに探究・調査する、という方針を採らずに、以下で述べるように、無限後退を利用するという戦略それ自体の哲学的含意に目を向けてみたい。

さて、ブラッドリーの無限後退が案外に射程の長いものであり、解釈の仕方によっては危険なものであることが明らかとなったが、実際には、彼の議論に対する反応はどのようなものであったのであろうか。

一般的には、ブラッドリーの所論は激しい反対に晒された。彼の哲学は観念論の典型とみなされ、後に抬頭した实在論者に徹底的に攻撃された。その中心にいたのは、ケンブリッジのいわゆるブルームズベリー・グループを構成する若手知識人・文化人の構成メンバーであったラッセルとムーアである。むろん彼らこそ、その後英米哲学の主役の座に就くことになる分析哲学の先駆けに他ならない。

ラッセルは、『数学の原理』において、関係の存在を否定する論者を、単子論者 monadist (ライプニッツ、ロツツェ) と一元論者 monist (スピノザ、ブラッドリー) に分類したうえで、それぞれの難点を指摘し、関係が存在することを主張した^{viii}。単子論者は、関係をそれぞれの主語に内属する性質に還元する。たとえば、Rab を ar_1 かつ br_2 とする。関係は主語の観念としてしか存在しない。一元論者は、複数の主語のあいだの弁別を否定し、ひとつの主語しか存在しないとすることで関係を解消する。たとえば Rab を $(ab)r$ とする。 (ab) はもはや複数の主語ではなく、それらが融合したひとつの実体である。このとき関係 R はこの唯一の実体の性質となり、もはや関係ではなくなる。両者が訴える戦略はそれぞれ異なるものであるが、共通する問題点があり、それは、関係と逆関係の区別が不可能になる、というものである。

また、ムーアは論文「内的関係と外的関係」において、「すべての関係は内的である」というブラッドリーの主張を論理的に精緻化することを試み、その結果、内的であるということはある種の必然性と解釈したうえで、明らかに必然的ではない関係が存在する以上、ブラッドリーの主張は誤りであると結論づけた^{ix}。

こうした度重なる攻撃によってブラッドリーの内的関係説は否定され、一元論を確立するための理論的基盤は崩壊させられた。その絶対的観念論は悪しき形而上学の典型であり、科学革命から取り残された時代遅れの思想とされた。いっそう時代が下った現在では、もはや一顧だにされないという惨状を呈するに至っており、その没落ぶりから批判の激しさが偲ばれる^x。

さて、英国哲学史におけるブラッドリーとその後継者とのあいだのこうした思想的対立の経緯は歴史的事件としての革命を想起させ、非常に興味深いものではあるが、彼らの間には年代の隔たりがあり、思想的衝突が生じるのは致し方ない面もある。とくに、現代論理の急速な発達及ぼした影響は甚大であると言えよう。論理の体系化と操作性の向上という技術的進歩は、論理思想それ自体の発展を促し、ブラッドリーの論理観は急速に陳腐化した。こうした状況を考慮に入れば、弁証法的思弁に基づく内的関係説の没落は必然であったと言わざるをえないであろう。

5. 意識の形而上学

しかしそれでも、こうした思想史上の転換は自明なものではないように思われる。その事情を仔細に検討すると、分析哲学の登場以前から、ブラッドリーを含む観念論の哲学に対する異議申し立てがすでに起こっていて、時代は大きく推移しつつあったように感じられるからである。もしそのようなことが起きていたと言えるならば、内的関係説は新しい論理（現代論理）の登場という外部要因のみによってではなく、形而上学的思惟の発展という内部要因によっても乗り越えられ、観念論は实在論へと道を譲った、ということが言えるのではないか。

そこで、いま目を向けてみたいのは、ブラッドリーとブルームズベリー・グループとのあいだに位置する世代の形而上学である。英国思想史において、その中間の世代に属するのはホワイトヘッドであるが、彼は、ベルクソン、フッサールという大哲学者と全く同世代である。興味深いことに、彼らは、相互に直接の影響関係にはないものの、その精神において非常に親近的な思想をそれぞれ育む、という思想的共振現象を起こした。そして、彼らの精神はブラッドリーのものとは異なっており、新しい時代に向けて踏み出す気配を確実にその身に纏っている。このような事情に注目して、内的関係説に別の角度から光を当て、それはいかなるものなのかを改めて考えてみたい。

さて、現代形而上学を代表する三哲フッサール、ベルクソン、ホワイト

ヘッドの思想的共通項とは何であろうか。それは、いずれも直観を重んじる、ということである。そのような彼らの哲学を「意識の形而上学」としてひとくくりにするのは便利であろう。その主題からして観念論的傾向が皆無とは言えないが、少なくともブラッドリーのような徹底した観念論者と比較するかぎり、同程度に観念論的であるとは言えない。たとえば、精神的なものとして唯一の絶対者を指定することはない。意識の形而上学には多元論的実在論の傾向がある。

すると次のように考えることができるのではないか。たしかにブラッドリーと実在論の断絶は、初期分析哲学の勃興によってもはや隠しおおくのできないものとなったが、のちにこのような決定的断絶へと拡大することになるごく細かいひび割れが、すでにブラッドリーとこの先行する世代のあいだに走っていたのではなかっただろうか、と。

なお、ブラッドリーと同世代でありながら、思想的にはむしろ意識の形而上学者たちに近いのがジェイムズである。周知のように、ブラッドリーとジェイムズのあいだには論争があり、とくに重要な争点のひとつは内的関係説の是非をめぐるものである。ジェイムズは明確にこれに反対し、関係は外的であると主張する。ここに見られるブラッドリーとジェイムズのあいだの距離もまた、将来の亀裂を予告するかのようである。

意識の形而上学者たちに共通する思想についてもう一言だけ述べておこう。それは、経験を、統一体をなしている所与を分析する過程である、ととらえるところである。これは、彼らが揃って重んじるのが直観、感じ feeling であることからの帰結である。多様な所与の総合が、概念が担うべき機能なのだとしたら、いわばその逆であるといえる対照的な操作、統一的所与の分析は、それを受容する直観が担うべき機能である。したがって、彼らが判断について論じるとき、その判断論もまた直観の役割に注目するものとなる。形成された概念の形態の分析がなされる代わりに、むしろ概念それ自体が形成される過程に焦点が当てられてゆくのである。

では、彼らの判断論においては、ブラッドリーの無限後退はどうなるので

あろうか。たしかに、彼らはとりたてて関係判断あるいは関係命題について論じているわけではない。しかし、ブラッドリーにおいてすでにそうであったように、問題の本質は多なる要素の統一はいかにして可能か、ということであった。したがって、判断一般が何らかの分節をもった関係的構造をもっているということを認めるかぎり、ブラッドリーの提起する問題はつきまとい続けるのである。

しかし、彼らの判断論、命題論においては、ブラッドリーの問題は提起されなかった。このことは、もちろん彼らが単にそれを思いつかなかった、というだけのことかもしれない。しかし、この事態をそのような単なる思想上の事実として片付けてしまうべきではない。というのも、彼らの思想をよく検討すると、そこには、ブラッドリーの無限後退について検討する理由がない、という哲学的根拠を見出せるように思われるからである。

5.1. フッサール

それでは、意識の形而上学者の個々の見解を概観してゆくことにしよう。まずはフッサールの思想であるが、注目したいのは、『経験と判断』において展開されたその後期の論理思想である^{xi}。フッサールは論理的思考、理性の経験的根拠を前述語的経験にもとめ、その発生過程の現象学を遂行する。いわゆる「論理学の発生論」である。典型的な前述語的経験は知覚であり、これが判断の原型の構造を提供する。したがって、その構造の現象学的記述の内容から、フッサールが判断の構造をどのようにとらえていたのかが明らかとなる。われわれの言う総合と分析のいずれの様式がそこに見いだされるだろうか。

フッサールはより単純なケースから発展するものとして知覚の構造を記述する。知覚は、その複雑性により、大きく三つの段階に分けられる。端的に対象を受容する段階（端的な把握、観察的知覚）、能動的関心の下で、対象が基体とその規定からなる構造をもつものとして分析される段階（解明的観察）、そして、その対象と他の対象との関係が分析される段階（関係的規定

の観察)である。

これらの段階は、全体としては感性的・受動的な段階にありながら、そのなかで受動と能動がコントラストをなしている。また、全体として地平構造という、知覚に特有の構造をもっているが、地平を見出しつつもそのの手前にとどまり、それを展望するのか、それともその内部に入り込むかの違いや、対象に属するものとしての内的地平と、他の対象とのかかわりによって構成される外的地平との違いなどもある。すでに感性の次元において、これらの差異が複雑に入り組んで階層的構造を形成するのである。これらは以下のようにまとめることができよう。

【表 1 フッサールによる知覚の分析】

1	端的な把握	受動的	地平の外部
2	解明的把握	能動的	内的地平の内部
3	共存・連関の把握	能動的	外的地平の内部

このように記述される判断形成の現場においては、次のようなことが成り立っているように思われる。つまり、基体は、それから全く独立した規定をあてがわれるのではなく、いわばその中から規定を読み取られる。また、他の対象との関係も、諸対象が寄せ集められるというのではなく、対象のあいだの脈絡がやはり読み取られる。

単純な述定判断「A はbである」は、基体と規定からなる判断であるが、それらは分離しているのではなく、句切りが入れられている^{xiii}。それゆえ、フッサールの判断論の基本的な性格を次のように特徴づけてよいであろう。すなわち、判断は、現象学的な所与である無規定な経験を分析することによって形成される。

5.2. ベルクソン

続いて、ベルクソンの思想を見てみよう。とくに、生命について論じた

主著『創造的進化』において示された言語論に注目してみたい^{xiii}。これは、彼独自の生命論がそこに巻き付いて成長するためのいわば支柱であり、自説と比較対照する目的で引き合いに出されたものである。同書のテーマはあくまでも、知性がいかに実在である運動、変化をとらえ損ねるか、である。思考は、その映画的メカニズムにより、動きではなく、その代用物としての不動のものを措定してしまうのである。

しかし、ベルクソンがここで解剖してみせる知性の手口に真正の哲学的方法としての価値を置いていないことは明らかであるが、そうしたベルクソニズムの文脈を一度離れてこのくだりを虚心に眺めてみると、それは、知性が世界を如何に言語化するのかについて観察した結果の報告とみることもできる。

ベルクソンによれば、否定は肯定を前提する。それゆえ、何かを肯定するときが最も基本的な意識のありかたである。この「なにかをとらえ、肯定する」ときの意識について、ベルクソンの叙述は、そこに三つの段階を含む構造がある、としているようにみえる。言い換えれば、あることを肯定する判断の成立過程は、意識における三段階として把握可能であるように思われるのである。

まず、「われわれは世界に最初の一瞥を投げるや否や、そこにもろもろの物質を識別しない前に、種々の性質を区別する。」かくして状態が把握される。続いて、「われわれは、もろもろの感覚的性質の連続のなかから、物体の境界を定める。」かくして形態が把握される。そして最後に、「構成された事物は、その位置変化によって、全体のふとところで行われる深い変化を表す。」かくして運動、行為が把握される。

このようにしてとらえられるのは、本来であれば流動する実在のある表面ないし断面であり、運動の不動の似像であるが、興味深いのは、これらが自然言語の文法カテゴリである、形容詞、名詞、動詞にそれぞれ対応している、という指摘である。これをもとに、ここで述べられた肯定判断の意識のありかたを、むしろその発生過程と解し、それが三段階をなしているとする

ならば、判断の発生過程の基本的な構造を次のように要約することができるであろう。すなわち、第一段階には主述の構造がなく、第二段階においてまず主語となりうるものが登場し、第三段階において、主語同士の関連が問題となり、関係を含む文が登場する。このように解釈されたバルクソンの判断論は、先に挙げたフッサールの論理学の発生論の内容と、少なくとも親近的なものとは言えないであろうか。

5.3. ホワイトヘッド

続いて、もう一人の哲学者であるホワイトヘッドの判断ないし命題についての説を見てみよう。彼は、『観念の冒険』においてブラッドリーの関係論に明示的に言及し、自説とブラッドリーの説の違いについて短評を残している^{xiv}。

ホワイトヘッドの存在論は、現実存在性ないし現実契機とよぶ出来事が把握関係によって相互に関係しあうことをその基礎とする。すべての事象は関係によって結びつけられているとされる。他方で、ブラッドリーは諸項を包括する全体を要請する。こうした点からみて、両者はともに全体論的傾向を有すると言える。しかし、ホワイトヘッドが全体を多の結合とし、作用が関係的であるとするのに対して、ブラッドリーは経験の基礎にある作用を感情とし、それが非関係的であるとする。両者の存在論は根本的なところで異なっている。

ホワイトヘッドは、このようなブラッドリーとの差異を認識していたが、彼の説を全面的に否定はしなかった。ジェイムズを参照し、対象をもつより高次の意識が知覚であり、未分節な感情が感覚であるというその所論を引きながら、この点はブラッドリーも同様であり、感情には対象以上のものがあって、知覚が生きた感情のすべてではない、というその説を紹介する。このような意識の基本構造をホワイトヘッドも認めるのである。ただし、ブラッドリーが、感情以上のものが自我の対象となっている、とするのを、主体的形式以上のものが主体の与件になっている、とする。ホワイトヘッドに

あつては、意識は主体的形式の一部に過ぎない。この点がブラッドリーとは決定的に異なる、という。

ホワイトヘッドは、ブラッドリーの感情、すなわち主体的形式は、与件の統合か、あるいは与件を排除する否定的包握であり、ここに曖昧さがあるが、いずれにせよ、これらは包握の体系において理解可能なものである、という。

しかしながら、この曖昧さに関する指摘は、却って両者の違いを浮き彫りにするのではないか。ホワイトヘッドの包握は肯定的包握と否定的包握に分類できるが、これらのうち前者が感受である。したがって、主体が何かを感じるとき、それはかならず肯定的であり、与件のなかから何かを選び取っているのである。これは、われわれがこれまで述べてきた分析の手続きにあたるであろう。そして、ブラッドリーの感情がこうしたホワイトヘッド的感受と同一視できるかという点、おそらくはできまい。ブラッドリーの感情は、主体の統合過程に寄与するだけの作用ではなく、なによりもまず實在の直観であろう。それは、全体を包括する作用である。そしてこの作用の存在が暗示するのは、全体を包括できず、實在を断片的にしか表象できないために、實在を常にとらえそこなう知性のはたらきである。挫折を予告された知性のはたらきは、断片から實在を構成しようとする、むなしい綜合の作用なのではないか^{xv}。

否定的作用に関するホワイトヘッドの立場は、先のバルクソンの説を想起させる。それは、否定を派生的なものとし、そのさらに基底に根源的な関係を立てるという点で軌を一にしている。そこで与えられたものの中から、やがて判断が生成するであろう。だが、そこに至るまでの道程は、与件の分析という微細な操作の積み重ねであり、それが終了するときを以て、意識はひとつのプロセスを終えて次のプロセスへと移行するのである。

ホワイトヘッドによる意識の一般化について補足しておこう。彼はライプニッツを引き合いに出し、結合をモナドの中に閉じ込めた、と難じる。ライプニッツは、関係をあくまでも意識の延長線上に考えている。これ

はその用語法から明らかである。ライプニッツにおいては、高次の意識は apprehension、低次の意識は apperception とされる。この低次の意識が問題である。これは意識性が減衰した作用でなければならないから、そのことを明示した概念として prehension が採用されるのである。このように薄められてもなお、それは意識であると言えるのであれば、ホワイトヘッドとブラッドリーの立場は確かに一致するであろう。しかしそれは強弁ではなからうか。

5.4. ジェイムズ

最後に、上記の三人に深い影響を与えたジェイムズの思想を、その著書『根本的経験論』において展開されたものからみてゆこう^{xvi}。

ジェイムズは、すでに述べたようにブラッドリーと同世代の哲学者であり、ブラッドリーと直接に論争している。その内的関係論に明確に反対し、却って外的関係論を主張しつつ、関係それ自体の存在を主張した。

根本的経験論と称するその立場においては、経験の所与は「単なるあれ」であり、それ自体は本来無規定である。それらがさまざまな文脈において物体や心理状態へと分化する。その文脈を構成するために必要なものが、そうした項を結びつける関係である。文脈のなかの諸項は固定したものではなく、それぞれは経験全体の流動のなかにある。この点においてベルクソンの思想と通底する。

関係の存在の必要性の主張は、遅くともヒューム以降には定説化した心的原子論への批判を含んでいる。ヒュームからミルに至るまで、経験論においては、心的諸項の存在は認めつつも、それらのあいだの関係の存在は認めず、項のあいだの関係は連合によって処理された。この連合説は、しかしながら、経験のなかに経験に由来しないものを含むことを認めざるをえないであろう。同様の指摘は、やはり関係を認めないブラッドリーの思想にも当てはまる。ジェイムズはこの不整合のゆえにブラッドリーの絶対的観念論を退けるのである。

5.5. 経験の分析

意識の形而上学者たちの主張はどれも個性的であり、これらすべてを同一の思想とみなすことはできない。しかしながら、一列に並んだそれぞれの顔貌の上に浮かんだ同じ表情のような、ある思想的共通点を指摘することはできる。それは、ブラッドリーが多なる素材をいかにして結合するのかという問題を提起するのに対し、彼らはいずれも、意識の直観の所与が統一体をなしており、判断ないし命題の構造は、その統一的な基盤の分析過程そのものであると考えているように見える、という点である。こうした判断、命題の本性に関する分析と思索は、ブラッドリーによる判断論とははっきり対蹠的であるように思われる。単刀直入に言ってしまえば、彼らの叙述の方向はブラッドリーと逆であり、総合の過程には問題を認めない。

なぜ意識の形而上学者の立場においては、判断ないし命題における総合の問題は生じないのであろうか。彼らの説はいずれも、経験の一体性を前提に、そこから命題を獲得する過程を描いている。それゆえ、ブラッドリーの無限後退がひきおこされる場面が含まれない。当初の経験、与件、所与、どのように呼んでもよいが、経験の根源的基底は、潜在的な関係によって満たされており、無限後退の原因となる、結ばれずに終わる関係というものはない。現実には何かのあいだに結ばれる関係は、結ばれることのなかった他の諸関係によって押し出され、意識のうちに浮かび上がるのである。

では、ブラッドリーが提起した問題は、彼と対照的な立場に立つこうした哲学者たちの見解を受け容れることによって解決されるのであろうか。結論から言えばそうなるのであるが、しかし、それは論証なしで認めるわけにはゆかないことであろう。では、論証は可能であろうか。事態はそれほど楽観を許さないものではあるが、しかしながら、パラドックスの再検討によって、今ここで必要とされているかぎりでは、それは可能であるように思われる。

6. パラドックスの鏡像

これまで紹介してきたブラッドリーのパラドックスは総合のパラドックスであると言ったが、総合とは逆の操作であると定義できそうな分析という操作に関するパラドックスをつくることができるように思われる。それは、直観的には次のようなものである。

初めに一が与えられていたとする。いまこれを分析したい。だが、分析は一に含まれていないから、一と分析の分析が必要となる。そこでこの分析を加えることにする。しかし、これもその所与には含まれていないから、その所与と分析の分析が必要となる。以下、これを繰り返すことにより無限後退を生じる。

この議論を以下のように図式的に示すと、パラドックスの発生は明らかであろう。

【表2 分析のパラドックス】

0	U
1	U, D
2	U, D, D'
3	U, D, D', D''

分析するごとに、各段階とそれ以前の段階の区別が生成し、それが新しい分析の発生を促す動因になっている。

先のブラッドリーの無限後退は、総合がいつまでも終わらない、というパラドックスであった。それに対して、このパラドックスは、分析がいつまでも始まらない、というパラドックスである。このように対照的な性格をもつ点からみて、この新しいパラドックスは、ブラッドリーのパラドックスのいわば鏡像になっている。直観的に表現すれば、総合のパラドックスは目標が

次々と遠ざかってゆくもので、いわば「逃げ水」であるが、それに対して、分析のパラドックスは、出発点から動くに動けないとも言えるもので、いわば「空回り」である。

ブラッドリーの議論が形而上学的な問題であり、アリストテレスがプラトンのイデア論を難じたいわゆる「第三の人間論」と似ているということは夙に指摘されている^{xvii}。議論を整理した結果からみるに、この指摘は尤もであろう。

しかしながらこのパラドックスは、その内容をよく検討してみると、同じく有名なゼノンのパラドックスにもよく類似しているように思われる。いましがた提示した分析のパラドックスを隣に並べて、両者を一組のものとして眺めてみると、これらは同じ一本の思弁の樹になった果実のように見えてくる。それらが一群の問題の事例であるに見えることで、何らかの共通の問題の存在が示唆されてくるのである。ゼノンのパラドックスは、まさに群生する諸パラドックスの一部であり、ブラッドリーの無限後退も、他の諸パラドックスと同様の概念的コロニーを形成しているように見える。両者の親近性は、そのおかれている環境の相似性から由来するようである。

では、分析のパラドックスとゼノンのパラドックスはどのように対応づけられるのであろうか。ゼノンは多種多様な議論を残したようであるが、なかでも代表的なものとしては、以下の四種が知られている^{xviii}。

1. 分割による運動否定論
2. アキレウスと亀
3. 飛矢静止論
4. 競技場のパラドックス

これらをここで改めて詳細に紹介する必要はないであろう。これらのうち、ここで問題とすべきなのは1と2のパラドックスである。それぞれの内容を見てみると、1は、分析のパラドックスを、2はブラッドリーのパラ

ドックスを想起させる。それぞれの論証の構造を吟味して、そうである理由を説明しよう。

さて、これまでの順序の都合上、ブラッドリーのパラドックスに似ているはずの2のパラドックスから考察しはじめることとしよう。2のパラドックスはこうである。すなわち、アキレウスが前進すると、亀もまた前進する。アキレウスがさらに前進すると、亀もまたいくらか前進する。かくして無限に続く（無限に進行するプロセスを書き切るのはもちろんできないから、以下の表はプロセス全体のごく初めの部分だけを示している）。

【表3 ゼノンのパラドックス2】

	1	2	3
アキレウス	前進	前進	前進
亀	さらに前進	さらに前進	さらに前進
	追いつかず	追いつかず	追いつかず

改めて述べるまでもないのであるが、念のために注意しておく、このパラドックスが現実には起こるとエレア派が主張しているはずはない。鉢から逃げ出した亀を捕まえるという仕事は、アキレウスの如き半ば神ならぬ凡夫の身にあってもなし能うに決まっている。それゆえ、ここで無限級数の収束を持ち出すなどしてエレア派を論駁しようとするのは、パラドックスを提起した目的をとらえそこなった見当違いである。このようなことは現実には生起しないのだから、ここでエレア派から問われているのは、運動の概念を含みながらもそれにとどまらず、世界を多と表象する観念上の操作の内的機構の解明である。

そうであればこそ、この概念的錯誤を一般化し、運動以外の事柄についても妥当するように改変することが可能である。そこで、アキレウスの前進を、関係による項の総合とし、亀による前進を、新しい結合する項の付加とするように解釈しなおす。すると以下ようになる。

【表4 総合のパラドックス】

	1	2	3
関係	Rab	SRab	S'SRab
新しい項の付加	Rab, S	SRab, S'	S'SRab, S''
	総合失敗	総合失敗	総合失敗

このように解することで、ブラッドリーの無限後退を、ゼノンの第二のパラドックスの翻案ないし変奏とみるのが可能となる。

つづいて、その鏡像であるわれわれの分析のパラドックスが、ゼノンの1のパラドックスと類似していることを確かめてみよう。1のパラドックスとはこうである。運動するものは、終点に到達するまでにその半分の地点に到達せねばならないが、そのためにはさらにその半分の地点に到達せねばならない。かくして無限に続く。これは次のように図式的に整理できるであろう。

【表5 ゼノンのパラドックス1】

	1	2	3
目的となる運動	終点 T	変更された終点 T'	変更された終点 T''
必要とされる運動	その半分 T'	その半分 T''	その半分 T'''
	不達	不達	不達

このパラドックスの構造には、分析のパラドックスの各段階を次のように当てはめることができる。

【表 6 分析のパラドックス】

	1	2	3
目的となる分析	所与 U の分割 D	変更された分割 D'	変更された分割 D''
必要とされる分析	D のための分割 D'	D' のための分割 D''	D'' のための分割 D'''
	未達成	未達成	未達成

こうして、分析のパラドックスは、ゼノンの第一のパラドックスと相似したものであるということが確かめられた。

通常、ゼノンの四つのパラドックスは運動や連続を否定するものと考えられている。エレア派の根本的な主張は、存在は一であるという一元論であるから、多を含意する運動や連続を否定することで論証がなされるわけである。だが、すでに注意したように、これらのパラドックスを、運動や連続という概念に固有のものとする必要はない。それらをも含む、より広い文脈において同様のパラドックスを構成することは可能であり、ここで挙げた総合のパラドックスと分析のパラドックスはそうした一般化の例になっている。

この議論の系として、次のことが主張できる。すなわち、ゼノンのパラドックスが真正の哲学的問題として認められるなら、われわれの分析のパラドックスも同様に認められるべきである。

7. 分析のパラドックスの射程

さて、以上のように検討されなおした分析のパラドックスから、いかなる哲学的帰結が引き出されるであろうか。先に確認したように、ブラッドリーの無限後退、すなわち総合のパラドックスは、観念論を導くために用いられうるのであった。それに対して、その鏡像としての分析のパラドックスは、以下のように、実在論を導くために用いられうるように思われる。すなわち

こうである。

- ① はじめにおかれた所与は一である（一元論）
- ② 無限後退（分析のパラドックスにより）
- ③ 矛盾
- ④ 所与の単一性の否定
- ⑤ 多元論

ところで、多元論は、その主張の内容からみて観念論ではありえない。経験主体の多元性が原理的に排除されないからである。したがって観念論は否定され、実在論が帰結することになる。

ここで、考察の本来の道筋に戻ると、ゼノンのパラドックスはすべて一元論のために提起されているのであるから、分析のパラドックスから多元論に有利な帰結を引き出すのは不当である、という反論がありうる。

しかし、ゼノンの分割による運動否定論はそもそも極端に簡潔であり、相矛盾する解釈をも許容する。しかも、重要なのはその議論の構造あるいはロゴスであり、したがって運動否定論という内容すら捨象することも可能なのである。それゆえ、ここで示した議論は人工的ではあるが、不可能なものとは言い切れない。

ほぼ蛇足と言ってよいが、ここで、観念論の立場がひとつの窮地に追い込まれているという事態に注意しておこう。つまり、もし観念論者がブラッドリーの無限後退を認めるならば、上記の論証が示しているように、そのときには実在論を擁護せねばならなくなる。他方で、もし無限後退を認めないならば、そのときには少なくとも、ブラッドリーが提起したようなかたちでの観念論は、その有力な論拠を失うのである。

8. 結論

考察をまとめよう。得られた結果は何を意味しているのでしょうか。焦点

が与えられたのはブラッドリーの無限後退であったが、その分析と帰結の検討を通じて、その背景にある内的関係説を受け容れるべきか否かを判断できるところにまでわれわれは至ったように思われる。これまでの議論から、それは重大な不整合を含んでいると言えるかもしれない。少なくとも、これに基づく絶対的観念論の擁護は困難である。

しかしながら、ブラッドリーの無限後退に類するパラドックスは、多元的実在論の擁護に用いることができた。このことは、いかにもヘーゲル弁証法風の無限後退というスタイルの議論が、実はそれ自体は形而上学的イデオロギーから独立であり、形而上学を展開するためのひとつの手段ないし技術として用いられうる、ということを示している。われわれの考察は、ブラッドリー哲学の批判という比較的小さな目的を超克し、形而上学の一層の発展の可能性の探求というより大なる目的のためにいくらかの貢献を果たしたと信じる。

9. おわりに

思想史上、ブラッドリーが活動した時期は観念論から実在論への転換期にあたり、現代哲学の基盤が整備された時期である。ブラッドリーの無限後退は、時代の狭間に咲いた旧式形而上学の徒花のように扱われることがあるが、そうした偏見を排して、その思想に虚心に向き合うならば、そこに現代における形而上学の可能性を読み取ることができる。無限後退についてはさらにいろいろな解決策がありそうであるが、それらを体系的に考察するのは今後の課題としたい。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものである。

注

- i Bradley (1893: pp.17-18)
- ii Bradley (1893: p.27f.)
- iii Gaskin (2008: p.315)
- iv Meinong (1899: pp.193-197) , Grossmann (1965: pp.153-170)
- v Hylton (1990: ch.1, 2)
- vi Manser (1983: ch.7) , Allard (2005: ch.3)
- vii Gaskin (2008: § 70)
- viii Russell (1937: ch.26)
- ix Moore (1922: ch.9)
- x そのなかにあつて擁護論を展開するのは Sprigge (1983) である。
- xi Husserl (1985: Kap.2)
- xii Husserl (1992: Beilage I)
- xiii Bergson (1941: pp.275-315)
- xiv Whitehead (1967: pp.230-234)
- xv McHenry (1992: pp.68-72)
- xvi James (1996: ch.1-3), Sprigge (1993: Part 1, ch.4)
- xvii Gaskin (2008: § 70)
- xviii Barnes (1982: ch.13)

文 献

- Allard, J. W., 2005, *The Logical Foundations of Bradley's Metaphysics: Judgement, Inference, and Truth*, Cambridge: Cambridge U. P.
- Barnes, J., 1979/1982, *The Presocratic Philosophers*, London: Routledge
- Bergson, H., 1907/1941, *L'évolution créatrice*, Paris: PUF (松浪・高橋訳『創造的進化』白水社)
- Bradley, H., 1893, *Appearance and Reality*, Oxford: Clarendon
- Gaskin, R., 2008, *The Unity of Proposition*, Oxford: Oxford U. P.
- Grossmann, R., 1965, *The Structure of Mind*, The University of Wisconsin Press
- Hylton, P., 1990, *Russell, Idealism, and the Emergence of Analytic Philosophy*, Oxford: Clarendon
- Husserl, E., 1939/1985, *Erfahrung und Urteil*, Hamburg: Felix Meiner (長谷川訳『経験と判断』河出書房新社)
- , 1929/1974/1992, *Formale und Transzendente Logik*, Hamburg: Felix Meiner (立松訳『形式論理学と超越論的論理学』みすず書房)

- James, W., 1912/1996, *Essays in Radical Empiricism*, Lincoln: University of Nebraska Press
- Manser, A., 1983, *Bradley's Logic*, Oxford: Basil Brackwell
- McHenry, L. B., 1992, *Whitehead and Bradley: A Comparative Analysis*, Albany: SUNY Press
- Meinong, A. 1899, 'Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung', *Zeitschrift für Psychologie der Sinnesorgane* 21, pp. 182-272
- Moore, G. E., 1922, *Philosophical Studies*, London: Routledge & Kegan Paul
- Russell, B., 1903/1937, *The Principles of Mathematics*, London: Routledge
- Sprigge, T., 1983, *The Vindication of Absolute Idealism*, Edinburgh: Edinburgh U. P.
- , 1993, *James & Bradley: American Truth and British Reality*, Chicago: Open Court
- Whitehead, A. N., 1933/1967, *Adventures of Ideas*, New York: The Free Press

Metaphysical Implications of the Doctrine of Internal Relations

Nobuto SAITO

ABSTRACT

This paper considers the philosophical significance of Bradley's theory of internal relations, a leading philosopher of British idealism. In particular, by reexamining the consequences of the paradox of infinite regress derived from it, it will be indicated that this argument is widely applicable, and therefore Bradley's argument is independent of his metaphysical position of absolute idealism. This result may seem surprising to those who believe that the flaw in speculative metaphysics lies in the inadequacy of the conceptual device itself, but in reality this belief is unfounded. It should be shown that there may be a correct use of reason by separating the technique of argument from the metaphysical claim.

